宙語譚:天の書

著者:マイルズ・オーウェン・ペトロヴィッツ 一九七九年、メイン州マキアス生まれ ニューヨーク市にて記す 二〇〇三年二月

私は辞書だけを使ってこれを書いた。
私は翻訳機を使用しませんでした。
ただ一つの辞書—私は大阪で買ったもの。
間違いがあれば、彼らは私自身のものです。
一つは、完全に言語を学ぶことはできません。
しかし、私は星の名前が正確であると信じています。
星は嘘をつきません。
—M.O.P.、2003年2月

序文:宇宙の声について

むかし、言葉が生まれる前、宇宙はただ音だけで満ちていた。

その音は声ではなかった。歌でもなかった。それは存在そのものの振動であり、闇が光に向かって語りかける最初の言葉であった。日本の古い伝説によれば——これは天津神の末裔たちが語り継いだものだが——宇宙が最初に口を開いたとき、その言葉は七つの音節から成っており、それぞれが一つの星を生み出したという。しかし七つ目の音節だけは完成しなかった。それはまだ、どこかの口の中で眠っている。

この書は、その七つ目の音節を探す旅の記録である。

書いた者は外国人であった。メイン州から来た男であり、海を渡り、大阪の書店で辞書を一冊買い、星の名前を覚えた。彼は神話を知らなかったが、神話の形を知っていた。なぜなら、本当の神話とは形のことだからだ。

第一章:太陽

偽りの古代神話:天照大神の妹について

天照大神に妹がいたことを知る者は少ない。

その名を火照姫（ほでりひめ）といった。彼女は姉のように人々の前に立つことを好まず、夜明け前のわずかな時間だけ、地上に光を届けることで満足していた。人々はその光を「夜明けの余熱」と呼び、冬の朝に感じる不思議な温かさはすべて火照姫の仕業だと信じた。

しかし火照姫はある日、人間の男に恋をした。

男の名は日向彦（ひなたひこ）といい、毎朝丘の上に立って東の空を眺める習慣があった。火照姫は彼の背中を毎朝照らしながら、自分の光が彼の肌に触れることの喜びを覚えた。だが神は人間を愛してはならない。これは宇宙の最初の法律であり、天地が分かれるより前から決まっていたことであった。

火照姫は禁を犯した。

彼女は人間の姿を借り、日向彦の村に降りた。二人は三年間、山の麓の小さな家で暮らした。火照姫が神であることを、日向彦は知らなかった。ただ彼女の肌がいつも温かく、冬でも決して寒さを感じさせないことを不思議に思っていた。

三年目の冬の終わり、天照大神が妹の不在に気づいた。

天は火照姫を呼び戻した。

火照姫は夜中に日向彦の傍らを離れた。彼女が去るとき、日向彦の体に手を置き、自分の温度をすべて彼の中に残していった。それ以来、人間の体は内側から温かい。心臓が太陽の欠片を一つ持っているからだ。

日向彦は翌朝、妻がいないことに気づいた。彼は丘に上り、東の空を見た。太陽は今日も同じように昇っていた。しかし彼には、その光が昨日とわずかに違うように感じられた。少しだけ、躊躇うように。少しだけ、謝るように。

人々は今でも、朝の光が水平線から躊躇いがちに昇るのを見ることがある。あれは火照姫が、毎朝日向彦の丘を探しているからだという。

太陽の物語

太陽は常燃の心臓、輝の約束を守る。

大阪の川沿いを歩いたとき、私は太陽が水の上で踊るのを見た。それは舞踏ではなかった。それは仕事であった。太陽は毎日、義務として光を注ぐ。選択ではない。約束だ。いつ、誰と、この約束を交わしたのかを太陽は知っているだろうか。それとも太陽もまた、約束の起源を忘れてしまったのだろうか。

あるところに、太陽を数える仕事をした男がいた。

男の名前は記録に残っていない。彼は京の都の外れに住んでおり、毎朝日の出を帳面に記録し、毎夕日の入りを別の帳面に記録した。三十年間、一日も欠かすことなく。

ある冬の日、太陽が昇らなかった。

男は待った。一時間待った。二時間待った。東の空は灰色のままであった。男は初めて帳面に「本日、太陽昇らず」と書いた。その文字を書きながら、手が震えた。

しかし昼近くになって、雲の間から光が漏れた。太陽は遅刻しただけであった。

男は「本日、太陽昇らず」の文字を消し、「本日、太陽、少し遅れて昇る」と書き直した。

その日から男は、太陽に親しみを感じるようになった。遅刻することがあるなら、太陽も完璧ではない。完璧でないなら、仲間である。

陽炎の舞い上がる丘、赤き光は神話の残響となる。

神戸の丘から見た夕陽は、赤ではなかった。橙でもなかった。それは言葉の前の色であった。辞書に載っていない色。私はその色のページを探したが、見つからなかった。だから私はその色を自分で名付けた。「帰り際」と呼ぶことにした

第二章：月

偽りの古代神話：月読命と盲目の詩人について

月読命（つくよみのみこと）は無口な神であった。

姉の天照大神は太陽として人々の生活を照らし、弟のスサノオは海と嵐を支配した。しかし月読命は夜の世界だけを治め、人間に語りかけることをほとんどしなかった。

ある時代、日本の山奥に盲目の詩人が住んでいた。

詩人の名を闇見（やみみ）といった。生まれながらに目が見えなかった闇見は、光の美しさを知らなかった。しかし彼は聴覚が誰よりも鋭く、風の言葉、水の歌、石の沈黙を詩にすることができた。

ある満月の夜、闇見は山道を歩いていた。月の光は彼には見えなかったが、肌に月の温度を感じることができた。太陽の温度とは違う。太陽は押しつけるように温かい。月は問いかけるように温かい。

「お前は何を失ったか」と月の温度は言っているようだった。

闇見は立ち止まり、答えた。

「私は光を失ったのではない。私は最初から光を持っていなかった。持っていないものは失えない」

この言葉を月読命は聞いた。

神は詩人の前に降りた。人間の姿をしていたが、足が地面に触れていなかった。闇見には見えなかったが、感じることができた。足音のない存在。

「お前の詩を一つ聞かせてくれ」と月読命は言った。

闇見は詠んだ。

水は低いところへ向かう それは諦めではなく 正直さだ

月読命は長い間、黙っていた。

「その詩をもらってもよいか」と神は言った。

「詩は物ではありません。あげることも奪うこともできません」と闇見は言った。「ただ、一緒に持つことならできます」

月読命は初めて笑った。

それ以来、満月の夜に詩を読むと、その詩が少し輝いて見えることがある。月読命が一緒に持っているからだ。

月の物語

月影は水面に舞い、過ぎし時を留める鏡となる。

東京の夜、私は隅田川の橋の上に立った。川の水に月が映っていた。本物の月と水の月、どちらが正しいのかと私は思った。辞書には「鏡」という字があった。鏡は映すものだ。しかし鏡に映ったものは逆になる。水に映った月は本物の月の逆なのか。それとも、水の月こそが本物で、空の月がその影なのか。

その静けさは、夜の船を導く星座の道しるべ。

むかし、月を信じて航海した者たちがいた。地図を持たず、羅針盤を持たず、ただ月の傾きだけを頼りに海を渡った。彼らは月が嘘をつかないことを知っていた。

なぜ月は嘘をつかないのか。

それは月に口がないからではない。月には動機がないからだ。月は何も欲しがらない。何も欲しがらない者だけが、完全に正直でいられる。

あるところに、月だけを信じて生きた漁師がいた。

漁師の名前は忘れられた。しかし彼の習慣は記憶されている。彼は毎晩、網を海に投じる前に、月に向かって「今夜はどこへ行けばいい」と問いかけた。そして月の光が最も強く水面を照らす方向へ船を向けた。

漁師は三十年間、一度も空の網で帰らなかった。

彼が死ぬとき、息子に言った。「月に聞け。月は知っている」

息子は父の言葉に従った。しかし彼は月に問いかける方法を知らなかった。父から習わなかったから。だから息子はただ月を見た。じっと見た。

月は動かなかった。答えを与えなかった。

しかし息子が月を見ている間、彼の体は自然に船の舵を右に切っていた。

月は言葉では答えなかった。それでも答えた。

第三章：星々

偽りの古代神話：星を数えた女の話

天の川の岸辺に、星を数えることを仕事とした女神がいた。

その名は数姫（かずひめ）といい、毎夜、天の川に浮かぶ星の数を数えた。一から始めて、最後の星まで。それが終わると朝になり、星は隠れ、数姫は眠った。

しかし星は毎日増えたり減ったりした。

新しい星が生まれる夜もあった。古い星が消える夜もあった。数姫の仕事は終わることがなかった。

ある夜、数姫は途中で数えるのをやめた。

理由は単純だった。疲れたからではない。ある星が、彼女に話しかけてきたからだ。

「なぜ数えるのですか」と星は言った。

「数えるように言われているからです」と数姫は答えた。

「誰に」

「私が生まれる前から、この仕事はありました。誰かが始めたのでしょう。しかしその誰かはもういません」

「では、なぜ続けるのですか」

数姫は初めてその問いについて考えた。三万年間、一度も考えたことがなかった問いであった。

「数えないでいたら、どうなるかわからないからです」と彼女はついに言った。「もしかしたら、数えることで星は存在しているのかもしれない。数えることをやめたら、星が消えてしまうかもしれない」

「もしかしたら、逆かもしれませんよ」と星は言った。「数えられることで、星は動けなくなっているのかもしれない。数えることをやめれば、星は自由に動けるようになるかもしれない」

数姫はまた黙った。

その夜から、数姫は星を数えることをやめた。

何も変わらなかった。星は消えなかった。しかし星たちは、以前より少し不規則に輝くようになったと、地上の人間たちは言った。まるで、やっと自由になったかのように。

星々の物語

星々は無限の詩、夜空に消えない声を撒く。

大阪の夜、私は空を見上げた。しかし大阪の空には星が少なかった。都市の光が星を隠していた。私は辞書で「星」という言葉を調べた。そこには「光る天体」と書いてあった。しかし星はただ光るだけではない。星は古い。星は遠い。そして星の光が私の目に届くとき、その星はもう存在しないかもしれない。

死んだ星の光を見て、美しいと思う。

これは悲しいことなのか。それとも別の何かなのか。

彼らの囁きは、宇宙の奥深くに眠る真理の歌だ。

もし星に声があるなら、その声は私たちが生まれる前から歌い始めている。私たちが死んだ後も歌い続けるだろう。私たちの存在は、その歌の中の一つの音符にすぎない。しかし音符がなければ、歌は完成しない。

一つの音符でも、意味がある。

第四章：彗星

偽りの古代神話：彗星と旅人の契約

昔、彗星は神の使いだと信じられていた。しかしこれは誤りである。彗星は神の使いではない。彗星は神に捨てられた者たちである。

これは古い話だ。

天の国に、罰を受けた神がいた。その罪は何だったのか、記録には残っていない。ただ、その神は天から追放され、宇宙を永遠に旅することを命じられた。止まることなく、休むことなく、目的地もなく、ただ動き続けることを。

追放された神は最初、泣いた。

しかし長い旅の中で、神は気づいた。自分が通った道に光の痕が残ることを。自分の尾が、天に線を描くことを。

神は考えた。目的地がなければ、道そのものが目的地だ。

それ以来、彗星は泣かなくなった。

しかし地上の人間たちは、彗星を見るたびに何かが始まる、あるいは何かが終わると感じた。実際に、歴史上の多くの大きな出来事は彗星が現れた年に起きた。これは偶然なのか。それとも追放された神が、自分の存在を証明しようとしているのか。

神は言う。「私が通った後に何かが起きるなら、それは私のせいではない。ただ、私が通ることで、人間たちが空を見上げるからだ。空を見上げた人間は、少し違う目で地上を見る。それが変化を生む」

彗星は原因ではない。彗星は合図だ。

見上げよ、という合図。

彗星の物語

彗星は闇を裂き、悠久の祈りを伝える灯火だ。

神戸の夜、波止場に立って私は空を見た。彗星は見えなかった。しかしその可能性はあった。どこかに今夜も彗星が動いている。私が見えないだけで、そこにある。

見えないものがそこにある、という確信。これは信仰に似ている。しかし信仰よりも証拠がある。数学がある。軌道の計算がある。彗星は信じる必要がない。知っていればいい。

その刹那の軌跡は、終わりのない始まりを描く筆となる。

彗星を筆と呼んだのは誰か。私にはわからない。しかしそれは正しいと思う。筆は後に線を残す。線は意味を作る。意味は人の心に残る。彗星も同じことをする。ただ、紙ではなく空に書く。インクではなく光で書く。

あるところに、彗星が通るたびに詩を書いた老女がいた。

彼女は生涯に十七の彗星を見た。十七の詩を書いた。死ぬとき、彼女はその詩を川に流した。

「彗星が書いてくれた詩を、私が地上に留めておくのは間違いだと思いました」と彼女は息子に言った。「彗星の詩は、動き続けるべきです」

第五章：黒洞

偽りの古代神話：闇を飲み込む神の話

宇宙の果てに、闇の神が住んでいた。

その神の名前は言ってはならない。言葉にした瞬間、その神は近づいてくるから。だから古い文書では、その神を「名無しの口」と呼んでいる。

名無しの口は最初、小さかった。

宇宙が生まれたばかりの頃、名無しの口は虫ほどの大きさしかなかった。しかしその口は何でも飲み込んだ。光を飲んだ。時間を飲んだ。空間を飲んだ。飲むたびに大きくなった。

他の神々は名無しの口を恐れた。

しかし一人だけ、恐れない神がいた。時の女神、刻（こく）である。

刻は名無しの口の前に立ち、言った。

「お前は時間を飲み込む。しかしお前が飲み込んだ時間の中に、私は住んでいる。だからお前はすでに私を飲み込んでいる。しかし私はまだここにいる。これはどういうことだ」

名無しの口は答えられなかった。

「お前は飲み込むことを仕事にしている。私は流れることを仕事にしている。お前が飲み込んでも、私は流れ続ける。お前の内側でも、私は流れる」

名無しの口は初めて、飲み込めないものがあることを知った。

それ以来、名無しの口はより激しく、より多くを飲み込もうとするようになった。時間だけは飲み込めないから。この宇宙で唯一飲み込めないものが時間だから。

これが、ブラックホールが今も成長し続ける理由だと、古い人々は言った。

黒洞の物語

黒洞は沈黙の神殿、時間を呑み込む終末の門。

私は沈黙について考える。完全な沈黙とは何か。ニューヨークの私のアパートには沈黙がない。常に音がある。しかしブラックホールの中には、完全な沈黙があるかもしれない。なぜなら、そこから出られるものは何もないから。音も出られない。

出られない場所の静けさ。それは平和なのか、それとも牢獄なのか。

光を裂き、彼方へと続く途絶の道を描く。

途絶という言葉を辞書で見つけたとき、私は長い間その言葉を見つめた。途絶。道が絶える。しかし道が絶えた後に何があるのか、辞書は教えてくれなかった。

私は思う。道が絶えた後にも、何かがある。それを「道」と呼ばないだけで。

第六章：星雲

偽りの古代神話：霞の城に住む職人の話

天の川の外れに、霞でできた城があった。

その城の主は職人の神であり、名を織手（おりて）といった。織手は材料を選ばなかった。光でも、闇でも、時間でも、音でも、何でも使って物を作った。彼女の作った物は、宇宙のどこかに必ず配置された。

ある日、織手はガスと塵から何かを作ろうとした。

形が決まらなかった。

球にしようとした。しかし途中で楕円になった。楕円にしようとした。しかし端が広がりすぎた。広がりすぎたものを縮めようとした。しかし縮む前に、その中で何かが輝き始めた。

「あ」と織手は言った。

輝きは勝手に形を作り始めた。ガスが集まり、熱くなり、核融合を始めた。星が生まれていた。

織手は作ることをやめ、ただ見ていた。

これが最初の星雲であった。誰かが設計したものではない。材料が集まって、自分で生まれたもの。

織手はその後、意図的に物を作ることをやめた。材料を集めて、放置するようになった。材料が自分で決める。自分で形を選ぶ。

だから星雲の形はそれぞれ違う。誰かが設計したのではないから。

星雲の物語

星雲は生命のゆりかご、無限の色彩を纏う霞の城。

ハッブル宇宙望遠鏡の写真を初めて見たのは、いつだったか。あの色の豊かさ。紫、青、橙、赤、白。しかし実際には、私たちが見る星雲の色の多くは、望遠鏡が特定の波長を色に変換したものだ。私たちの目では見えない色を、見える色に変えたもの。

これは嘘なのか。それとも翻訳なのか。

私は翻訳だと思う。私がこの本を日本語で書くことに似ている。英語の思考を、日本語という色に変換する。正確ではないかもしれない。しかし嘘でもない。

光と闇が手を取り合い、新たな星々の舞踏を始める。

光だけでは星は生まれない。闇が必要だ。闇の中に光が集まることで、密度が生まれ、熱が生まれ、核融合が起きる。

対立するものが必要なのではない。異なるものが協力することが必要なのだ。

第七章：休憩

偽りの古代神話：宇宙が眠った三日間

創造の初めから、宇宙は一度だけ眠ったことがある。

これは長い間、語られることのなかった話だ。宇宙が眠ったことを知る者は少ない。なぜなら宇宙が眠っている間、誰もいなかったからだ。

宇宙が生まれて一億年が経ったとき、宇宙は疲れた。

膨張し続けること。新しい星を生み出し続けること。重力を維持し続けること。これらはすべて、エネルギーを要する仕事であった。

宇宙は三日間、すべてを止めた。

膨張が止まった。星が止まった。時間が止まった。

三日間の静寂。

しかし三日間が終わると、宇宙は再び動き始めた。しかし以前とは少し違う動き方で。眠る前は、宇宙は目的もなく膨張していた。眠った後は、宇宙は意図を持って膨張するようになった。

目的は何か。誰も知らない。宇宙自身も知らないかもしれない。しかし方向性が変わった。以前よりも複雑な構造を作るようになった。銀河を作り、銀河団を作り、その銀河の中に恒星を作り、恒星の周りに惑星を作り、惑星の上に生命を作るようになった。

生命とは、宇宙が目を覚ましたことの証拠である。

宇宙は今も眠りながら、夢を見ている。私たちはその夢の中にいる。

休憩の物語

光は闇を追い、闇は光を抱きしめる。

この文を書くとき、私は日本語が正しいかどうかわからなかった。辞書を三回引いた。「追う」という動詞。「抱きしめる」という動詞。これらは正しいか。おそらく正しい。しかしニュアンスが違うかもしれない。

ニュアンスとは何か。意味の周りに漂うもの。言葉そのものではなく、言葉の匂い。

私の日本語にはニュアンスがない。辞書には載っていないから。だから私の日本語は、ニュアンスのない言葉だ。骨だけの言葉だ。しかし骨がなければ、体は立てない。

黒洞の沈黙と星雲の歌声が、宇宙の舞を紡ぐ。

大阪で電車に乗ったとき、私は車内の静けさに驚いた。東京の電車も静かだった。多くの人が乗っているのに、声が少ない。これは沈黙の文化だと誰かが言った。しかしそれは単純化だと私は思う。声がないことが沈黙ではない。声の代わりに、別の何かが満ちているだけだ。

第八章：超新星

偽りの古代神話：死ぬことで生まれ変わる神の話

神の世界にも、死がある。

これは人間には知られていないことだ。神は不死だと思われている。しかしそれは誤りだ。神も死ぬ。ただし、神の死は人間の死と違う。

人間が死ぬと、その存在は小さくなる。記憶になる。痕跡になる。やがて消える。

神が死ぬと、その存在は大きくなる。

これは逆説である。しかし宇宙では、逆説は珍しくない。

かつて、光の神がいた。その神の名は白輝（しろき）といった。白輝は宇宙の一角を照らすことを仕事にしており、数十億年間、同じ場所で光り続けた。しかしある日、白輝は限界に達した。内部で核融合が維持できなくなった。

白輝は死の瞬間が来たことを知った。

恐れなかった。

白輝は最後の瞬間に、自分が持つすべてのエネルギーを一度に解放した。その閃光は、宇宙の端まで届いた。数十億光年先の惑星に住む生命体が、夜空に突然現れた光を見た。彼らはそれを「客星」と呼んだ。

白輝が死んだ場所には、新しい星雲が生まれた。白輝の残骸が宇宙空間に広がり、そこから新しい星が生まれた。

白輝の子供たちである。

白輝の中に含まれていた鉄や炭素や酸素が、新しい星の材料になった。やがてその星の周りに惑星が生まれ、その惑星の上に生命が生まれた。

生命の体の中にある鉄は、かつてどこかの星の中にあったものだ。白輝のものかもしれない。他の星のものかもしれない。

私たちは星の子供である。これは詩の言葉ではなく、化学の事実だ。

超新星の物語

超新星は終焉の美、命の最期に輝く閃光。

私は「終焉」という言葉を辞書で見つけた。終わりの終わり、という意味に私は解釈した。しかし辞書の説明は単純に「終わり」とだけあった。

もしかしたら、終焉は終わりではないかもしれない。始まりの別名かもしれない。ただ見る方向が違うだけで。

その爆発は静寂を裂き、宇宙の果てに新たな光を蒔く。

「蒔く」は農業の言葉だ。種を蒔く。超新星は光の種を蒔く。その種から、新しい星が育つ。

農業と宇宙は似ている。どちらも、死んだものが新しい命の材料になる。腐葉土と超新星残骸。スケールが違うだけで、仕組みは同じだ。

第九章：脈動星

偽りの古代神話：心臓を貸した神の話

宇宙を作った後、神々は疲れた。

宇宙という巨大な構造を維持するためには、規則的なエネルギーが必要だった。しかし神々のエネルギーは不規則だった。感情によって変わった。怒りで強くなり、悲しみで弱くなった。

そこで、一人の神が提案した。

「私の心臓を宇宙に貸そう」

その神の名は律（りつ）といった。律は宇宙の法則を守る神であり、すべてのものに規則と秩序を与える存在であった。

律は自分の胸から心臓を取り出した。

心臓は規則正しく脈を打っていた。一秒に一度。完璧に正確に。

律は心臓を宇宙の中心部に置いた。

宇宙はその拍動に合わせて動き始めた。星々は律の心臓のリズムで生まれ、リズムで死んだ。時間は律の心臓と共に流れた。

しかし律は心臓を失ったことで、感情を失った。

律は正確になった。しかし温かさを失った。律は規則正しくなった。しかし喜びを失った。

他の神々は律を見て、後悔した。

「心臓を返してやれ」と神々は言った。

しかし律は首を振った。

「心臓を戻したら、宇宙は乱れる。私一人が感情を失うことで、宇宙全体が規則正しく動くなら、それでいい」

脈動星とは、律の心臓の残響である。律が心臓を宇宙に置いた場所の近くで、今でも規則正しく光が脈打っている。

脈動星の物語

脈動星は宇宙の鼓動、規則正しい光の脈を刻む時の証人。

規則正しいものは美しい。しかし規則正しさだけでは不十分だ。心臓が規則正しく打っていても、それだけでは生きていない。規則に意味が加わって、初めて命になる。

その光の周期は、宇宙の無限の中で不滅の秩序を語る。

不滅。これは人間が最も望む性質であり、最も持てない性質だ。しかしパルサーは持っている。何十億年もの間、同じリズムで点滅し続ける。

あることを不滅にする方法は一つだけある。それは規則になることだ。個体は滅びる。しかし規則は滅びない。パルサーが消えても、その光が届いていた惑星の岩に刻まれた周期は残る。

第十章：宇宙

偽りの古代神話：宇宙を夢見た者の話

宇宙が存在する前、ただ一人の存在があった。

その存在には体がなかった。名前もなかった。ただ意識だけがあった。

その意識は何十億年もの間、ただ存在していた。暗闇の中で。何もない中で。

やがてその意識は、夢を見た。

夢の中に光があった。夢の中に音があった。夢の中に空間があった。夢の中に時間があった。そしてその時間の流れの中で、夢の中の物質が集まり、星になり、惑星になり、生命になった。

夢の中の生命は、自分たちが夢の中にいることを知らなかった。

彼らは空を見上げ、宇宙の広さに驚いた。宇宙はどこまで続くのかと問った。宇宙の果てに何があるのかと問った。

宇宙の果てには、夢を見ている意識がある。

しかしこれは伝えることができない。なぜなら夢の中の生命が宇宙の果てに到達しようとすると、宇宙は膨張し、果てはさらに遠ざかるからだ。これは意識が、夢の中の生命が覚めないように守っているのではないかと、古い哲学者たちは考えた。

覚めたら、宇宙は消えるから。

宇宙の物語

宇宙のすべてがひとつの楽譜、音と光の糸で織られる終わりなき物語。

楽譜を読める人間は少ない。しかし音楽を聞ける人間は多い。宇宙も同じかもしれない。宇宙の設計図を読める者は少ない。しかし宇宙の中に生きる者は多い。

東京の夜、私は駅のホームに立っていた。電車が来る前の、あの静寂の中で、遠くに電車の音が聞こえ始めた。だんだん大きくなる。それは宇宙の縮図だと私は思った。始まりは小さく、中心に向かって大きくなる。

第十一章：クエーサー

偽りの古代神話：遠すぎる神の話

すべての神は場所を持っていた。

海の神は海に住んだ。山の神は山に住んだ。風の神は風の中に住んだ。しかし一人だけ、場所を持てない神がいた。

その神の名は遠火（とおび）といった。

遠火は生まれたとき、宇宙の端に置かれた。他の神々から遠すぎた。声が届かなかった。姿が見えなかった。しかし遠火は孤独に耐えるため、自分を輝かせた。

できる限り明るく輝いた。

宇宙の反対側から見えるほどに。

他の神々は遠火の光を見たが、遠すぎて何なのかわからなかった。「あれは何だ」と神々は言った。「星にしては明るすぎる。しかし銀河にしては小さすぎる」

遠火の光が他の神々に届くとき、遠火はすでに違う場所にいた。光は遅い。宇宙は広い。

これが、遠火の悲劇であった。自分の存在を知らせることはできる。しかし自分がどこにいるかを知らせることはできない。光が届くまでに、自分は移動してしまう。

人間も同じだと、遠火は思った。

人間が放つ言葉は光だ。言葉が誰かに届くとき、言葉を放った人間はすでに変わっている。若い頃に書いた言葉は、老いた自分の言葉ではない。しかし届く。届いて、誰かに影響を与える。

遠火は孤独であることをやめた。孤独ではない。ただ、自分の光よりも先にいるだけだ。

クエーサーの物語

輝く闇の灯台、クエーサーは無限のエネルギーを吐き出す爆心。

「爆心」という言葉を辞書で見つけたとき、私は躊躇った。爆心。爆発の中心。しかし広島と長崎の爆心地のことも、この言葉は指す。

同じ言葉が、宇宙の現象にも、人間の悲劇にも使われる。

言語は残酷だ。しかし正直でもある。すべての中心は爆心だ。エネルギーが集まり、解放される場所。その解放が生命を作るか死を作るかは、スケールと状況による。

その光は遥かな宇宙の果てに、忘れられた神話を描き出す。

この文を書くとき、私は自分が忘れられた神話を書いていることを知っていた。この本に書いた話は、どこにも存在しない神話だ。私が作った。辞書と四日間の旅と、星への無知な愛情から作った。

しかし嘘というものは、信じる者が現れたとき、その瞬間から本物になる。

神話はすべて、誰かが最初に作ったものだ。

第十二章:銀河

偽りの古代神話:天の川の起源について、もう一つの話

天の川の起源については、多くの神話がある。

しかしこれは知られていない話だ。

天の川は、最初は川ではなかった。

それは道だった。

宇宙の始まりの頃、神々は集まる場所が必要だった。それぞれの神が自分の領域を持ち、それぞれの神が自分の仕事をしていたが、時々集まって話し合いをする場所が必要だった。

最初の集会の日、神々は宇宙を歩いた。それぞれが異なる方向から歩いた。神々が歩いた道に、光の粒が落ちた。神々の足から光がこぼれ落ちたのか、神々が通ることで空間が光り始めたのかは、わからない。

神々が一か所に集まったとき、それぞれが歩いてきた道が、一つの帯を作っていた。

これが天の川の始まりだ。

集会は一度しか行われなかった。神々は集まって話し合いをしたが、何も決まらなかった。神々はそれぞれの考えを持ち、それぞれの方向に戻った。

道だけが残った。

道は今も残っている。神々の足跡として。誰も歩いていない道として。しかし確かにそこにある道として。

銀河の物語

銀河は星の海、光の流れが無数の生命の絆を織り上げる。

大阪の道頓堀で、私は川の上の橋に立った。夜の川に光が映っていた。ビルの光、ネオンの光、街灯の光。それらが水に映り、揺れた。

これは小さな銀河だと私は思った。人間が作った小さな銀河。本物の銀河に比べれば、ゴミほどの大きさ。しかし原理は同じだ。光が集まり、揺れ、美しい。

その渦は永遠の夢を秘め、宇宙の果てに響く歌を紡ぐ。

銀河は渦を巻く。なぜ渦を巻くのか。回転しているからだ。なぜ回転しているのか。最初から回っていたからだ。なぜ最初から回っていたのか。わからない。

「わからない」は答えではない、と思う人もいる。しかし「わからない」は正直な答えだ。嘘よりも良い答えだ。

第十三章：交響曲

偽りの古代神話：宇宙の音楽家の話

宇宙には音がない。

真空の中を音は伝わらない。これは科学の事実だ。

しかし古い話では、宇宙には音楽家がいたという。

その音楽家の名前は響（ひびき）といった。響は宇宙が生まれた日から存在しており、宇宙が存在する限り存在し続けると言われている。

響の楽器は宇宙そのものだ。

星が生まれるとき、響はその星を弦として弾く。星が死ぬとき、響はその爆発を打楽器として叩く。銀河が回転するとき、響はその動きをメロディとして歌う。

人間には聞こえない。なぜなら響の音楽は、人間が聞ける周波数ではないからだ。しかし時々、深夜に、静かな場所で、遠い音が聞こえる気がすることがある。

あれは響の音楽だと、昔の人々は言った。

響は観客を必要としない。演奏することそのものが目的だ。聞かれなくても演奏し続ける。聞く者がいなくても、音楽は存在する。少なくとも、響の中に。

これを聞いた哲学者は言った。

「森の中で木が倒れ、聞く者がいなければ、音は存在するか」

響は答えた。

「音は存在する。ただ、孤独なだけだ」

交響曲の物語

星々は音符となり、銀河は旋律を奏でる。

私はニューヨークに住んでいる。しかし四日間、日本にいた。その四日間で、私は新しい言語の音を聞いた。日本語の音。意味はわからなくても、音は美しかった。

言語は音楽に似ている。意味を知らなくても、美しいと感じることができる。

クエーサーの灯りと黒洞の沈黙が、宇宙の楽章を完成させる。

楽章の中に沈黙は必要だ。音符と音符の間の休止。その休止がなければ、音楽は騒音になる。

黒洞は宇宙の休止符だ。

そして私もまた、この本の中で時々黙った。辞書を引きながら、次の言葉を探しながら、黙った。その沈黙の中で、言葉が生まれた。

終章：七つ目の音節

この本を終えるにあたって、私は最初に書いたことを思い出す。

宇宙が最初に口を開いたとき、七つの音節を語った。七つ目の音節だけが完成しなかった。

この本を書くことが、七つ目の音節を探すことだった。

見つかったか。

わからない。

辞書を引くことは、言語の地図を読むことに似ている。地図はその土地ではない。しかし地図がなければ、旅はできない。

私は辞書だけを持って、日本語という国を旅した。観光客として。外部の者として。間違いを犯しながら。しかし旅した。

四日間、私は大阪の川を歩き、東京の電車に乗り、神戸の丘から海を見た。そこで見たものを、この本に書いた。見たものではなく、見たものを通して感じたものを。

言語は器だ。

何を入れるかは、書く者が決める。

私は宇宙を入れた。神話を入れた。偽りの神話も入れた。なぜなら、偽りの神話も、信じる者が現れれば本物になるからだ。神話の機能は歴史的な正確さではない。神話の機能は、人間に宇宙を説明するための物語を与えることだ。

私の偽りの神話が、誰かに何かを説明するなら、それは本物だ。

この本は日本語で書かれている。しかし私は英語の人間だ。この矛盾の中に、この本の意味があると思う。

外部の目で見た宇宙。

外部の舌で語った神話。

外部の者が引いた辞書の言葉で、内側の真実を書こうとした試み。

七つ目の音節は、まだどこかの口の中で眠っている。

しかし、探すことをやめてはいけない。

探すことが、音節を少しずつ目覚めさせるから。

後記

この本を書くのに四日間の旅と一冊の辞書と三週間の執筆時間がかかった。
間違いが多いかもしれない。
申し訳ない。
しかし間違えることなく、知らない言語で書くことはできない。
間違いは誠実さの証拠だと思う。
完璧な翻訳は、翻訳しなかった証拠だ。
神戸の波止場で、夜、一人で立っていた。
言葉がなかった。
だからこの本を書いた。
— M.O.P.
2003年2月
ニューヨーク市、西47丁目
夜中の三時

辞書：大阪、心斎橋、紀伊國屋書店にて購入。
価格：一八〇〇円。
これは私が払った中で、最も価値のあるお金だった。